

大学生が列成して

京田辺市 さんさん山城

霜害なく順調な新茶摘み 収量 倍増 入札値も最高

木津川
河川敷

茶園に清らかな風

京田辺市の障害者就労支援事業所で農福連携センターの「さんさん山城」(新免修施設長、藤永実センター長)恒例「茶摘みの集い」が始まり、きょう29日に最終日を迎える。

地元特産で、加工品の原料にもなるてん茶(抹茶原料)などの手摘みは、霜害がなく順調に進んだ。

「収量は昨年の倍

近く、入札価格もさんさん史上の最高値を付けた」と茶葉の出来栄えに胸を張る。

聴覚障害者の就労支援施設として2011年4月に開所したさんさんは、農業を通じて地域とつながりを持ち課題解決に寄与する「農福連携」を進める先駆け。

木津川玉水橋上流約1キロの岸辺には生産家から引き継いだ自家茶園を有し、同年以来、11回目となる茶摘みを今年18日にスタート。お茶を栽培し始めた当初、藤永センター長

らスタッフと利用者が他園で肥培管理や茶摘みの手ほどきを受け、知識と技術を年々積み上げていった。

「今年には霜被害がほとんどなかった。5月に霜が降りた昨年と比べ収量は倍近く採れそう。しっかりと肥培管理も行い、茶葉の状態はとても良い」と強調する。

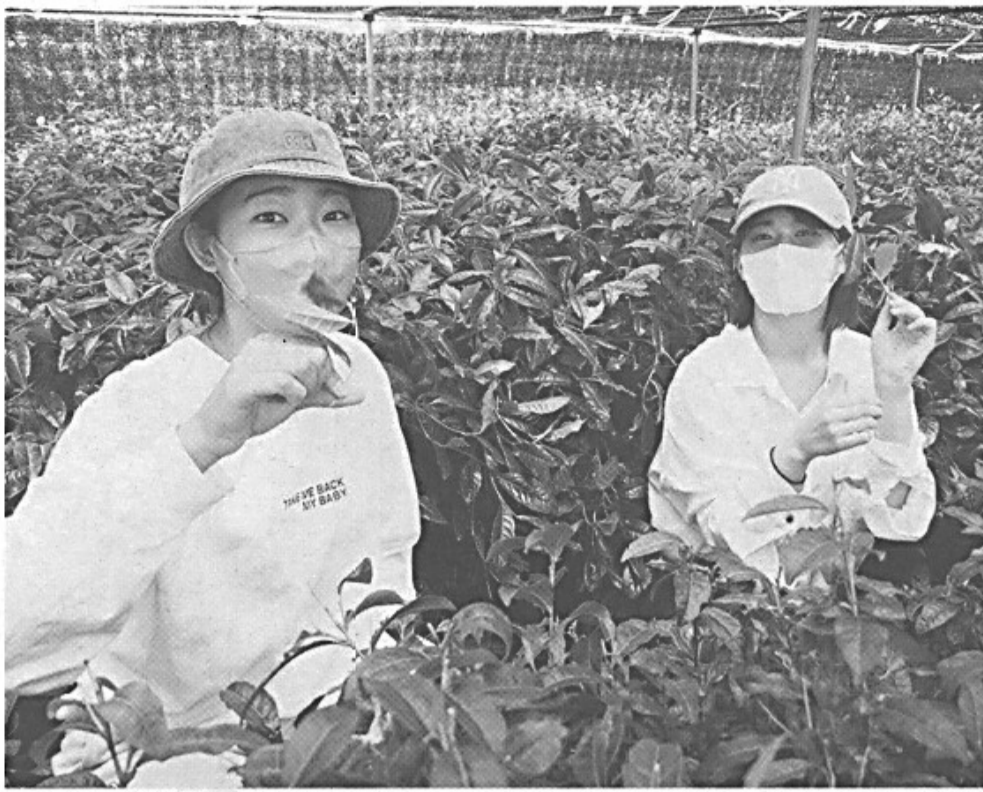
品種「さみどり」「ごころ」「やぶきた」を順に摘採し、シングルオリジン(単一品種)

藤永センター長は「販売する煎茶のあとには、てん茶の手摘みも約10日間にわたり、ワンコイン500円でお腹いっぱい食べられるランチが好評なコミュニティカフェを休業し、利用者・職員も「摘み子」に徹する。

東京や、大阪など近隣からも足を運ぶボランティアは常連に加え新たな参加者も目立つ。先週末は1日当たり70人にも及び、若男女は覆い下茶園で新茶の息吹を感じ取りながら作業に励んだ。

若者の参加も年を経るごとに増え、摂南大・同志社大・藍野大などの学生たちも、これまで馴染みがなかった手作業にチャレンジしている。

利用者・職員・有志ら約60人が手摘みに励んだ28日も、気温は30℃近くに達したが、



覆い下で茶葉を一つひとつ手摘みしていった藍野大の高橋陽花さんと川上桃果さん



横一列に広がった学生たちが丁寧に茶葉を摘み取っていった



清々しい茶園の空気を吸い込んだ本田花音さん



覆い下茶園は和気あいあいとしたムードに包まれた

新免施設長と農福連携が縁でつながり、今年初めて学生とともに参加した茨木市の藍野大学医療保健学部作業療法学科の中井秀昭助教ら一行は、3日間のうち2日目の体験。

3年生25人は酒瓶ケースを逆さに座布団を添えたいすを持ち込み横一列となり新芽を摘み取っていった。

理学療法士などを志す学生のうち、高橋陽花(はるか)さん、茨木市は「お茶と言えば段々畑をイメージしていた。味わいを出すのに覆いが必要で手間暇かけるスタッフにお茶への愛を感じたい。天ぷらで食べてみたい」、川上桃果さん、甲賀市は「産地出身で小学生の頃は茶

若者も胸弾ませて

道部。でも、茶摘みは初めて。普段飲んでるけど大変なのが分かった」と、本田花音(かほね)さん、京田辺市大住は「新芽を区別するために手摘みがよいのかなあと感じた。田辺に住んでいても茶園の中に入らないので、きょうは身近に感じる事ができた」と声を弾ませた。

さんさんでは、てん茶の一部を市場に卸すほか、宇治抹茶「燦

燦(手摘み)のブランドで「ごころ」や「ぶきた」品種を販売。濃茶大福や濃茶クッキーといった自家園原料の加工品も人気を集める。

コミュニティカフェは31日(火)から営業再開。近鉄新田辺・JR京田辺駅より徒歩約15分。問い合わせは同施設 0774-397113まで。

田中住研 0774-397113



心を込めて手摘みする佐古恵美さん



個別のかごから大きな竹かごへ茶葉を移し替える

覆い下には時折心地よい爽やかな風が吹き抜ける。やさしい光に包まれながら柔らかな新芽をつまんだ。